

『コレージュ・スピリチュエル』としての『ボードレール』<sup>1</sup>

重 見 晋 也

## はじめに

サルトルの『ボードレール』<sup>2</sup>は、1947年にガリマール社から単行本として刊行された。しかし、同作品はその前年となる1946年にポワン・デュ・ジュール社から『ボードレール』という同じタイトルで一度刊行されている。そして、このポワン・デュ・ジュール社版は、同社が1946年に刊行したボードレールの選集への序文として初めて刊行されたテキストをほぼそのままの形で再録している<sup>3</sup>。全文が掲載されたわけではないものの、『ボードレール』のテキストは、1946年5月号の『現代』誌と1945年1・2月の『コンフリユアンス』誌創刊号とに、それぞれ異なる断片が掲載されたことが知られている。『現代』誌は、周知のごとく、サルトルが1945年10月に創刊した雑誌であるが、そこに掲載するよりも前に『コンフリユアンス』誌に『ボードレール』の断片が掲載されたことは注目に値する。

というのも、『ボードレール』の断片に『コレージュ・スピリチュエル』<sup>4</sup>のタイトルを付して掲載した『コンフリユアンス』誌創刊号は、戦後に号数を数えなおして「創刊号」となっているだけであって、実際には1941年にリヨンで創刊されヴィシー政権とドイツ占領下をくぐり抜けた文芸誌なのである。そしてサルトルは、まだドイツ占領下にあった1943年の同誌第19号に、戯曲『蠅』の断片を寄稿した経験を持っている<sup>5</sup>。なぜ『コンフリユアンス』誌を選んだのかを問うたとしても、その答えを得るのは難しい。しかし、『コレージュ・スピリチュエル』としてのテキストと『ボードレール』の同じ部分との間で、どのような意味作用の違いが

1 本論は科学研究費補助金の支援を得て行った研究に基づいている：「サルトルの初期批評文芸作品の生成コンテキストに関する研究」（基盤研究(C)平成22年度～平成26年度、課題番号：22520305、研究代表者：重見晋也）

2 Jean-Paul SARTRE, *Baudelaire*, coll. « folio », Éditions Gallimard, 1947. 本論で用いる日本語訳については、次の日本語訳を参照した：ジャン＝ポール・サルトル著、佐藤朔訳、『ボードレール』、『サルトル全集』第16巻、人文書院、1956年。

3 Michel CONTAT et Michel RYBALKKA, « 46/101 », dans *les Écrits de Sartre*, Éditions Gallimard, 1970, pp. 142-143.

4 本論では異なる媒体で発表された二つのほぼ同じテキストを扱うため、『コンフリユアンス』誌に掲載されたテキストを掲載時のタイトルから『コレージュ・スピリチュエル』と呼ぶこととする。Jean-Paul SARTRE, « un Collège spirituel », dans *Confluences*, Lyon, nouvelle série no 1, janvier-février 1945, pp. 9-18.

5 Jean-Paul SARTRE, *Les Mouches. fragments*, dans *Confluences*, vol. III, no 19, avril-mai, 1943, pp. 371-391. Cf. CONTAT et RYBALKKA, « 43/35 », p. 88.

生まれるのかと問うことは、『ボードレール』の作品生成という観点からだけではなく、サルトルの思考を辿るという意味においても、またより広い射程からドイツ占領下における作品刊行の実践を研究するという意味においても、研究する価値をもっていると言えることができるだろう。

このような観点から、本論においては、『コレージュ・スピリチュエル』の成立時期について確認した上で、『ボードレール』の最初の断片として『コレージュ・スピリチュエル』を掲載した『コンフリユアンス』誌について、同誌が置かれていた社会状況を特に検閲制度という観点から概観する。その上で、『コレージュ・スピリチュエル』のテキストが社会的状況に如何に影響を受けたかが、本論の考察によりあきらかになるだろう。

## 1. 『コレージュ・スピリチュエル』の生成

『コンフリユアンス』誌に掲載された『ボードレール』からの抜粋には『コレージュ・スピリチュエル』というタイトルがつけられているが、これについてはミシェル・コンタとミシェル・リバルカも指摘しているように、抜粋されたテキストで用いられていることばに基づいている<sup>6</sup>。このことばを選んだのがサルトル自身なのかそれとも雑誌の編集部であったのかについては定かではないが、いずれにせよ後に『ボードレール』としてガリマール社から刊行されるテキストは、パリ解放から程なく1945年1・2月号の『コンフリユアンス』誌上に、『コレージュ・スピリチュエル』という抜粋の形で初めて公にされたのである。その後、『レ・タン・モデルヌ』誌にも別の抜粋が掲載されており、『ボードレール』の全文が初めて世に出たのは1946年まで待たねばならなかった。未刊行テキストに勢いのある若手作家の序文をつけて刊行するというスタイルを特徴としていたポワン・デュ・ジュール社の「Incidences」コレクション<sup>7</sup>の中で、サルトルのテキストはコレクションの第4号として刊行されたボードレールの選集『エクリ・ザンチーム』<sup>8</sup>への長大な序文として掲載されたのであった。コンタとリバルカはエディション間のヴァリエーションについて言及しておらず、それを信ずるならばテキスト間に重大な異同はないということになる<sup>9</sup>。

6 CONTAT et RYBALKA, « 45/63 », pp. 116-117 : « Ce fragment correspond aux pages 153-169 de l'édition Gallimard (1947) et tire son titre d'une expression utilisée à la page 166. »

7 « Incidences » コレクションについては、以下の拙論を参考のこと：重見晋也、「サルトル『ボードレール』のパラテキスト Point du Jour 版を対象とした調査の中間報告」、『広島大学フランス文学研究』、2011年、pp. 36-53.

8 Charles BAUDELAIRE, *Écrits intimes : Fusées, Mon Cœur mis à nu, Carnet, Correspondance*, les Éditions du Point du Jour, 1946.

9 序文として刊行された際にはページ番号がローマ数字だったのが、単著として刊行される際にはアラビア数字に置き換えられる、というような小さな異同についてはコンタとリバルカも言及している。Cf. CONTAT et RYBALKA, p. 142-143.

本論においてまず検討しておかなければならないのは、『コレッジ・スピリチュエル』は『ボードレール』の全体が書き上がるよりも前に書かれ刊行されたのか、それとも『ボードレール』の全体が書き上げられたのちに名実ともに抜粋され『コレッジ・スピリチュエル』として発表されたのか、というテキストの生成に関する点である。二つのテキストを比較してみると、『コレッジ・スピリチュエル』のテキストは、『ボードレール』として刊行されたテキストの段落の冒頭からではなく段落の途中から始まっていることにすぐに気づかされる。それだけではなく、そのまま掲載したのではテキストが途中から始まっているというはっきりとした印象を読者に抱かせることになるため、そうした居心地の悪さを拭い去るべく最初の数語が削除されているのを確認することができる<sup>10</sup>。とはいえ、このことは『コンフリユアンス』誌に掲載されたテキストが最初に執筆されていたことを意味するのではないだろう。むしろ、『コンフリユアンス』誌のテキストに付された注がそのまま『ボードレール』に残されているのを確認できること、テキストの組み方こそ異なっている<sup>11</sup>もののイタリックで強調されたことばなども二つのテキストで共通していること<sup>12</sup>などを考慮すれば、『コンフリユアンス』誌に断片的に刊行された時点では、『ボードレール』のテキストの全体は完成していたと考える方が蓋然性が高いと考えることができる。さらに、『コンフリユアンス』誌に掲載された際にテキストに付された『コレッジ・スピリチュエル』というタイトルにたいして、編集部は次のような注を付していることも付言しておこう：「これらのページはジャン＝ポール・サルトルの重要な試論から抜粋されたものである。この試論はモナコの D. A. C. 出版社の « Incidences » 叢書に収められるボードレールの *Ecrits intimes* への序論として近々発表されるだろう」<sup>13</sup>。この注記から判断すれば、のちに『ボードレール』となるテキストは、1945年の

10 『コンフリユアンス』誌に掲載されているテキストの始まりは « Baudelaire a noté lui-même [...] » から始まるが、該当する箇所は『ボードレール』では次のような段落を構成している：« Après ces observations, il nous restera peu à dire sur le fameux dandysme de Baudelaire : le lecteur établit de lui-même ses liens avec l'anti-naturalisme, l'artificialisme et la frigidité. Il demeure toutefois quelques remarques à faire. Et tout d'abord Baudelaire a noté lui-même que le dandysme est une morale de l'effort : [...] » (SARTRE, *Baudelaire*, p. 123.)

11 『ボードレール』では引用文の前後に空行が挿入されているが、『コレッジ・スピリチュエル』ではそうした配慮はされていない：« Faire tous les matins ma prière à Dieu, réservoir de toute force et de toute justice, à mon père, à Mariette et à Poë (*sic.*), comme intercesseurs. » (SARTRE, « Un Collège spirituel », p. 16 / SARTRE, *Baudelaire*, p. 133)。

12 前注の例では、ボードレールの『火箭』からの引用が問題であるため、『コレッジ・スピリチュエル』ではイタリックにおかれていないことばが、『ボードレール』ではボードレールの原文に従って修正されてイタリックにおかれている。しかし、サルトルの文章でイタリックにおかれたことばは、二つのテキストで共通している：cf. « Ainsi le devenir psychique chez lui, ne peut être que l'opération d'un incessant *travail sur soi*. » (SARTRE, « un Collège spirituel », p. 11 / SARTRE, *Baudelaire*, p. 126)。

13 « Ces pages sont extraites d'un important essai de Jean-Paul Sartre, qui paraîtra prochainement en introduction aux *Ecrits intimes* de Baudelaire, dans la Collection « Incidences », aux éditions de la D. A. C. à Monaco. » (Notes de l'éditeur, *Confluences*, no 1, nouvelle série, 1945, p. 9.) 『コレッジ・スピリチュエル』に付されたこの注で言及されている「D. A. C. モナコ出版社」版について、コンタトリバルカは見つか

時点で序文として発表されることが既に決まっていたのであり、その大半はすでに完成していたのである。

さらにボーヴォワールは『女ざかり』のなかで、サルトルが戯曲『蠅』と同時に執筆していたテキストの中に『コンフリユアンス』誌と『カイエ・デュ・スユド』誌からの依頼原稿が複数あってそれらを各誌に送付したと証言している<sup>14</sup>。開戦前はガリマール社の『N. R. F.』誌に主として作品発表の場を求めていたサルトルであったが、周知のようにドイツ軍による北部フランスの占領がはじまり、占領軍により『N. R. F.』誌の編集長がジャン・ポーランからピエール・ドリユ＝ラ＝ロシエルに挿げ替えられたため、虜囚の身を解かれたサルトルはフランス南部地域に作品発表の場を求めている。その結果が、『カイエ・デュ・スユド』誌であり『コンフリユアンス』誌への寄稿であったとも考えることができる。そこでまず『カイエ・デュ・スユド』誌についてみておくと、サルトルは1943年に同誌に三つのテキストを寄せているの確認することができる。『カイエ・デュ・スユド』誌に掲載されたサルトルのテキストはすべて批評テキストであり、アルベール・カミュ（1943年2月号）、ジョルジュ・バタイユ（1943年4月号、5月号）、モーリス・ブランショ（1943年10月号、11月号、12月号）を対象としている<sup>15</sup>。一方で『コンフリユアンス』誌に掲載されたテキストをみると、サルトルは『蠅』の断片を同誌で発表しているのみである。しかし、ボーヴォワールが依頼された原稿を「評論原稿 *articles critiques*」と呼んでいることを考えると、この『女ざかり』で言及されている『コンフリユアンス』誌から執筆を依頼された評論原稿が『コレージュ・スピリチュエル』であると考えることができる。

次に考えておかねばならないのは、『コレージュ・スピリチュエル』を『コンフリユアンス』誌に送付した時期についてであろう。ボーヴォワールの回想録からは、『蠅』の執筆と並行して幾つかの評論原稿をサルトルは執筆しており、その中には『コンフリユアンス』誌に送った評論原稿もあったことは既述した。この回想録の記述は、サルトルが結成したレジスタンス運動である「社会主義と自由」についての記述の中に挿入されている。この「社会主義と自由」は、前線に出征し虜囚の身にあったサルトルが解放されてパリに戻った際に結成したレジスタンス運動である。サルトルがドイツの捕虜収容所から解放されたのが1941年3月であり、パ

らなかつたと述べている。事実、フランス国立図書館のオンライン・カタログでも「D. A. C. モナコ版」を確認することはできない。Cf. CONTAT et RYBALKALKA, « Note dans l'article 46/101 », p. 143.

<sup>14</sup> « Nous travaillons beaucoup ; outre sa pièce [des *Mouches*], Sartre s'occupait de son traité de philosophie ; *Confluences* et les *Cahiers du Sud* lui avait demandé des articles critiques : il leur en envoya. » (Simone de BEAUVOIR, *la Force de l'âge*, Éditions Gallimard, 1960, p. 573.)

<sup>15</sup> 書誌情報は次の通り : Jesan-Paul Sartre, « Explication de *L'Étranger* », dans *Cahiers du Sud*, n° 253, février 1943, pp. 189-206 ; Jean-Paul SARTRE, « *Aminadab* ou du fantastique considéré comme un langage », dans *Cahiers du Sud*, n° 255, avril 1943, pp. 299-305 et n° 256, mai 1943, pp. 361-371 ; Jean-Paul SARTRE, « Un nouveau Mystique », dans *Cahiers du Sud*, n° 260, octobre 1943, pp. 782-790 et n° 261, novembre 1943, pp. 866-886 et n° 262 décembre 1943, pp. 988-994.

りに戻ったのが同年4月2日、同じ年の夏にはボーヴォワールとヴァカンスを使ってヴィシー政権下にあったフランス南部地域を自転車でめぐり、サルトルが新たに結成した「社会主義と自由」という名のレジスタンス運動への参加をジッドとマルローに要請するも不調に終わったことは、ボーヴォワールの証言や伝記からもよく知られている<sup>16</sup>。一方で、依頼された評論原稿と並行して執筆されていた戯曲『蠅』は、1942年12月には書き上げられ印刷を終了している<sup>17</sup>。このことから、サルトルが『コンフリユアンス』誌に依頼原稿を送付したのは、最長でも1941年夏から1942年12月の間の出来事ということになる。そして、その時点ではすでに断片的なテキストではなく、のちに『ボードレール』として刊行されるテキストが完成していたと考えることができるのである。つまり、『コンフリユアンス』誌は遅くとも1942年末の時点で、そして恐らくは『蠅』の断片原稿と一緒に、サルトルから『コレージュ・スピリチュエル』の原稿を受け取っていた。ところが、『コレージュ・スピリチュエル』の原稿が実際に掲載されるのは、パリ解放後に新シリーズとして再開された『コンフリユアンス』誌の1945年1・2月号においてなのであって、編集部へ原稿を送付してからかなりの月日を経て刊行されたことになる。

コンタとリバルカは、『ボードレール』の執筆時期を1944年とみなしたうえで、その時期について、「一方において、サルトルが政治的アンガージュマンの必要性和作家の道徳的な責務について繰り返し強調していた時期でもあり、また他方においてシモヌ・ド・ボーヴォワールのことばを借りて(『分別ざかり』、p. 56)、彼が「まだ弁証法的思考とマルクスの唯物論の豊かさをはっきりとは理解していなかった時期でもある」<sup>18</sup>と指摘している。われわれの考察からすれば、1944年よりずっと前に『ボードレール』は完成していたと考えることができるが、このことはコンタとリバルカが指摘するように『ボードレール』のテキストにたいするサルトルの内的要請を再検討することを要求するかもしれない。しかし、本論において問題としたいのはむしろ、『コレージュ・スピリチュエル』のテキストを取り巻く社会的要因であって、1944年がパリ解放へと向かう希望の時期にあったとすれば、1942年は11月の南北分割線の解消とドイツ軍によるフランス全体統治の開始という「出口なし」にも思える状況へと突入する時期にあたるという点であろう。それゆえ、コンタとリバルカが指摘しているように、サルトルが『ボードレール』のなかにおいて「政治的アンガージュマンの必要性和作家の道徳的な責務」を繰り返し強調するとしても、それは新たな時代へと向かう希望に支えられた呼びか

<sup>16</sup> Cf. Simone de BEAUVOIR, *la Force de l'âge*, pp. 550-569 ; Annie COHEN-SOLAL, *Sartre 1905-1980*, coll. « folio/essais », Éditions Gallimard, pp. 307-311.

<sup>17</sup> Cf. CONTAT et RYBALKKA, p. 88.

<sup>18</sup> « Cet essai sur Baudelaire, conçu d'abord comme une introduction à ses Écrits intimes — le fait est important à souligner — a été écrit en 1944, c'est-à-dire à une époque où, d'une part, Sartre tenait à insister sur la nécessité de l'engagement et sur la responsabilité morale de l'écrivain et où, d'autre part, selon Simone de Beauvoir (*La Force des choses*, p. 56), il était « encore loin d'avoir compris la fécondité de l'idée dialectique et du matérialisme marxiste ». » (CONTAT et RYBALKKA, p. 143.)

けであるというよりはむしろ、絶望の中で抵抗する勇気と覚悟の表現であると考えられるのである。

## 2. 『コンフリユアンス』誌と検閲

絶望へと向かう環境がいかなるものだったのかを、ヴィシー政権下およびドイツ占領下における出版状況という点から確認することができる。今日われわれがテキストを読むことができるのは、そのテキストが刊行されたという事実に基づいているし、テキストが刊行されるという事態は、平和な社会においてこそさしたる障害もなく実践することができるかもしれないが、1942年のフランスのように占領下という特殊な状況においては、いくつもの大きな困難を乗り越えてのみ実現可能だということを忘れてはならないだろう。このことを理解するために、われわれは『コンフリユアンス』誌が経験した検閲制度を例にとることにしよう<sup>19</sup>。

『コンフリユアンス』誌の創刊についてのエピソードは、戦時下において出版することがいかに困難であるかを物語っていると同時に、出版を取り巻く環境がいかに混乱していたかを示してくれている。第3号になって初めて編集長として名前が出てくるものの、1941年7月の創刊から1957年の廃刊までを通じて実質的な『コンフリユアンス』誌の編集長であり続けたルネ・タヴェルニエは、リヨンで同誌を創刊するにあたり一つの策を弄する。ヴィシー政権は検閲制度によって、物資の窮乏する戦時下にあつて新しい定期刊行物を創刊することを禁じていた。戦火を逃れてパリからリヨンに帰郷したタヴェルニエは、親友のマルク・バルベザが『ラルバレート』誌を新たに創刊したことを聞き、その手法をそっくり真似して禁じられていた新雑誌の創刊を実現させたのであった。すなわち、編集長には『ラルバレート』誌の創刊を手引きした老獪なジャック・オバンクを据えて、雑誌を戦争前に発行を始め戦争とともに休刊したものと主張して発行許可を得たのである<sup>20</sup>。このエピソードは、タヴェルニエ自身によって、パリ解放直後の『コンフリユアンス』誌上で明かされることになる。パリ解放直後の1944年8月号の『コンフリユアンス』誌の巻頭テキストで、タヴェルニエは読者に対して次のような告白をしているのである：「『コンフリユアンス』誌の発行は、その最初からヴィシー政府の情報省の役人たちのばかばかしいほどの才能に恵まれた軽業のおかげでのみ可能だったのだ。『コンフリユアンス』誌の発行許可は刊行再開を信じ込ませることで取り付けたもの

<sup>19</sup> ヴィシー政権下の検閲制度については、以下の拙論を参考のこと：重見晋也、「ドイツ占領下のフランスにおける検閲制度と文芸誌 *Confluences* サルトル『ボードレー』の生成との関連において」、『HERSETEC』、vol. 7, no. 1, 2013, pp. 25-56；重見晋也、「パラテキスト研究の問題点—*Confluences* 誌を対象とした調査の事例に基づいて—」、『HERSETEC』、2011, pp. 15-41。

<sup>20</sup> 『コンフリユアンス』誌の創刊については、タヴェルニエ自身が回想録ともいべきテキストを残している。Cf. René TAVERNIER, « Une Aventure : Confluences », dans *Poésie I, Les Poètes de la Revue Confluences*, No. 100-103, juillet-octobre, 1982, pp. 48-49.

だった」<sup>21</sup>。

こうして始まった『コンフリユアンス』誌の発行は、それなりの成功を取めているといえる。ヴィシー政権下で始まった文芸誌の刊行は、当初こそフランス南部の自由地域に限られてはいたものの、月間の発行部数は3,000部を超えていたし、特集の内容によっては10,000部から15,000部にまで膨らんだとタヴェルニエは証言している<sup>22</sup>。また、同誌の第19号(1943年4・5月)からは、北部地域の通信員としてクロード・モルガンなる人物の名前が裏表紙に掲載され始めており、ドイツ軍による占領の範囲が南部地域にも拡大されたことで、北と南の交通が容易になったことをうかがい知ることができる。いずれにせよ、ドイツ占領下の文芸誌一覧をまとめたオリヴィエ・カリゲルは、占領下における文芸誌の発行部数について、少ないもので30部から多いもので18,000部だと言及しており<sup>23</sup>、この指摘から考えると『コンフリユアンス』誌の発行部数は決して少なくはなかったといえることができるだろう。

とはいえ、その活動も常に順風満帆だったわけではない。何よりも物資の窮乏、おもに紙不足の解消は編集部にとっても頭の痛い問題だったようである。その証拠に、創刊号では年間購読料として90フランがフランス国内と植民地の読者に対して提示されているが<sup>24</sup>、第7号(1942年1月)からは早くも購読料が国内の年間購読料が120フランに値上げされている<sup>25</sup>。また、紙不足については早くも第2号のなかで言及され始め、1945年の新シリーズ開始まで断続的に喚起されることとなる<sup>26</sup>。

もう一つの問題として、創刊当初にはヴィシー政権によって、また1942年11月以降はドイ

21 « Dès l'abord, la parution de *Confluences* ne put avoir lieu que grâce à un tour de passe-passe favorisé par la sottise des fonctionnaires de l'Information vichyssoise. *Confluences* obtint l'autorisation de paraître en faisant croire qu'il s'agissait d'une re-parution. » (René TAVERNIER, « la Victoire en chantant ... », dans *Confluences*, Lyon, no 34, nouvelle série, août 1944, pp. 115-126.)

22 « [La revue *Confluences*] est limitée en principe dans sa diffusion aux départements de zone sud. Malgré ce handicap, le tirage de *Confluences* dépassera vite les 3.000 exemplaire et certains numéros, notamment les numéros spéciaux (celui sur le roman dirigé par Jean Prévost, celui sur Giraudoux, celui sur Valéry Larbaud) atteindront 10 et même 15.000 exemplaires. » (René TAVERNIER, « Une Aventure : *Confluences* », p. 52.) ただし、ここでタヴェルニエが言及している特集号は、1943年以降に発行されたものである：小説(第21-24号 [1943年7・8月])、ジロドゥ(第35号 [1944年9・10月])、ヴァレリー・ラルポー(第37・38号 [1944年12月・1945年1月])。

23 Olivier CARIGUEL, *Panorama des revues littéraires sous l'Occupation, Juillet 1940 - Août 1944*, Paris, Institut Mémoires de l'Édition contemporaine, 2007, p. 7.

24 フランス国外の読者には115フランで販売されている。

25 « Nous nous excusons auprès de nos lecteurs d'être dans l'obligation d'augmenter les prix de vente et d'abonnement de notre revue. » (*Confluences*, no 7, janvier 1942, 2e de couverture.)

26 « Les difficultés actuelles d'édition — pénurie de papier et de force motrice, diminution des moyens de transport — s'opposent à ce que *Confluences* paraisse avec toute la ponctualité qui serait désirable. » (*Confluences*, no 3, septembre 1941, 3e de couverture). 特に第11号からは次に引用した定型文が裏表紙などに毎号掲載されている：« La crise du papier nous obligeant à limiter strictement nos services de librairie, nous rappelons à nos lecteurs qu'ils ont intérêt à s'abonner afin d'être assurés de recevoir chaque mois leur exemplaire "Confluences". » (*Confluences*, no 11, juin 1942, 2e de couverture.)

ツ軍によって施行されていた検閲制度の問題がある。当時ヴィシー政権がフランス南部地域において施行していた検閲制度は、北部地域を占領していたドイツ軍の検閲制度に準じてはいたものの、開戦前に立法化された幾つかの検閲制度も効力を持ち続けており、結果として北部地域とは異なるヴィシー政権独自の検閲制度を採用していたと考えることができる。たとえば、北部地域で発布された販売禁止書籍のリストである「リスト・オットー」<sup>27</sup>は、図書館関係の業界紙である『ビブリオグラフィ・ド・ラ・フランス』<sup>28</sup>の1940年10月4日付第25-40号に別冊として挿入されフランス全土に配布された。「リスト・オットー」については、作成された当時からその実効性に疑問も出されており、1942年7月8日付で「リスト・オットー」の改訂第二版が、さらに1943年5月10日付で改訂第三版が、当時フランス出版社協会会長であったアンリ・フィリポンの名前を付して発表されている。いずれにせよドイツ占領軍がこうした文化政策を北部地域に対してだけではなく、南部地域に対しても執行していたことを忘れてはならないだろう。

こうしたドイツ軍に由来する検閲制度の有効性が疑わしいとしても、『コンフリユアンス』誌が、ヴィシーの検閲制度によって休刊させられたことは事実として認めなければならないだろう。タヴェルニエは1942年8・9月号を休刊せざるを得なかった理由について、パリ解放後の第34号（1944年8月）のなかで、ヴィシー政権の監督官庁の責任者であったポール・マリオンから受け取った1942年8月16日付の通達文を引用しつつ、アラゴンの詩を掲載したことを理由に『コンフリユアンス』誌にたいして2ヶ月間発行を停止する措置が通告されたことをはっきり証言しているのである<sup>29</sup>。

以上のように、サルトルが『コレージュ・スピリチュエル』の抜粋原稿を『コンフリユアンス』誌に送った1942年という年は、単にフランス全体としてドイツ軍による全体統治下への移行という衝撃を共有したというだけではなく、同誌にとっては検閲制度の直接的で具体的な衝撃に苦しんだ年でもあったのである。

27 「リスト・オットー」については、パルカル・フーシェの詳細な研究に負うところが大きい。Cf. Pascal FOUCHÉ, *l'Édition française sous l'Occupation. 1940-1944*, tome 3, Bibliothèque de Littérature française contemporaine de l'Université Paris 7, 1987, pp. 21-37. 同書には「liste Otto」の三つの版全てが再録されている。

28 « Cercle de la Librairie » という書店および図書館などで構成される団体が発行している週刊紙で、現在も発行されている。詳しくは次を参照のこと：Cf. Claude JOLLY, « ANNEXES : Le développement du Cercle de la librairie, syndicat des industries du livre », dans *Histoire de l'édition française. Le livre concurrencé 1900-1950*, sous la direction de Roger Chartier et Henri-Jean Martin, vol. 4, Fayard/Promodis, 1991, pp. 67-68.

29 René TAVERNIER, « la Victoire en chantant ... », dans *Confluences*, pp. 115-126.

### 3. 『コレージュ・スピリチュエル』の射程

サルトルが『コンフリユアンス』誌に送った『コレージュ・スピリチュエル』は、ボードレールの選集への序文としてその全文が刊行されることが、印刷時にすでに決定していたことについては本論においてすでに確認した通りである。実際、『ボードレール』と『コレージュ・スピリチュエル』とは、版の組み方などに由来する相違点はあるものの、テキストとしてはほぼ同じテキストから成立している。それゆえここにおいて問題となるのは、これまでに見てきたようなテキストにたいして外在的な要因が、テキストの意味作用をどのように変化させるのかを確認することにあるだろう。そのためには、『ボードレール』のうちで『コレージュ・スピリチュエル』のテキストにつながるが部分とそれに続く部分の関係を表面上の対立が確認することが必要となる。

『コレージュ・スピリチュエル』として抜粋される直前の『ボードレール』においてサルトルは、ボードレールの『ファンファルロ』にサディズムとマゾヒズムが共存していることを指摘し、女性とのマゾヒズムによる関係を隠すために過度のサディズムを行使しその女性を殺してしまうことをも強く望んでいたとしてボードレールを糾弾している<sup>30</sup>。『コレージュ・スピリチュエル』の冒頭でサルトルがボードレールのダンディズムを「努力の道徳」と定義づけるのは<sup>31</sup>、こうした極限状態の緊張によって保たれているボードレールの精神を最もよく表している事象として、サルトルがダンディズムを捉えているからであろう。この意味において、ボードレールのダンディズムは倫理的に肯定的な価値を体現するものでしかない。しかし、たとえボードレールが自らにダンディズムという名の無動機な苦行を課していたとしても、サルトルはボードレールにたいする批判的な態度を改めはしない。

まず何よりもボードレールがダンディズムに見ている無動機性は、サルトルにとっては無害であり、無益なものであり、役立たずなものにしか見えない。そしてこのダンディズムの無益さ以上にサルトルが批判しているのは、ボードレールがダンディズムという理想について、それが自己管理と自己実現への飽くなき努力によってしか実現し得ないのだということを明晰に直観し、その理解にもとづいて自己を所有することすなわち自己実現という高邁な理想を反省的に抱くことに成功していながら、「他人と違っている」ことにたいする個人的なこだわりをボードレールが捨て去ることができないでいたからなのである。こうしてボードレールは、

<sup>30</sup> « Ainsi la frigidité, qui est, à l'origine, stérilisation par le froid, trouve, enfin son véritable climat qui est la mort ; et sa figuration oscille, selon que Baudelaire balance lui-même entre le masochisme et le sadisme, du métal lunaire, glacé et incorruptible, au cadavre en train de perdre sa chaleur animale. Absence de vie ou destruction de la vie : *l'esprit* baudelairien tient entre ces limites extrêmes. » (SARTRE, *Baudelaire*, p. 123.)

<sup>31</sup> « Et tout d'abord Baudelaire a noté lui-même que le dandysme est une morale de l'effort » (SARTRE, « un Collège spirituel », p. 9 / SARTRE, *Baudelaire*, p. 123.)

「処刑者にして犠牲者 *bureau-victime*」という二つの異なる姿に引き裂かれる<sup>32</sup>。この二重の存在様態についてサルトルは、「自分自身にたいして客体となり、けばけばしく自己を飾り立て、塗りたくり、それからその客体をとらえ、つくづく眺めてから、そこに溶け込もうとする努力である」<sup>33</sup>と述べたうえで、ジョルジュ・ブランのボードレール論に論拠を求めつつ、「彼の精神的生成は、不断に自己にはたらきかける作用にほかならない。いつでも自己を最高の自在性 *disponibilité* の状態におくために、自己を制御し、拘束することである」<sup>34</sup>として、ボードレールのダンディズムが純粋な無償性の表現であることを断定している<sup>35</sup>。

さらにサルトルは、ダンディズムの倫理的側面と並行して存在する儀式的あるいは宗教的な側面も指摘している。「司祭と犠牲者 *le prêtre et la victime*」の二重性で示される宗教的側面は、しかしながら、ダンディズムの倫理的な無償性とそれに基礎づけられていた不断の努力との間に矛盾を生じさせる。というのも、ダンディズムへの宗教的性格の付与は、不断の努力によってしか達することができなかつたはずのダンディズムを、「『最も高貴で最も破壊しがたい機能と、労働や金銭ではえられない、天与の資質とに基づいているだけに、打ち壊すことのできない』ような、きわめて閉鎖的な貴族社会」<sup>36</sup>に変貌させてしまうからに他ならない。

こうしてサルトルはボードレールの自己欺瞞を告発するのだ。「処刑者にして犠牲者」という二重の存在様態を甘受してなおダンディズムという究極の理想を追求するならまだしも、倫理的側面を司祭にして犠牲者という宗教的な二重性に拡大解釈することによって、不断の投企を見せかけだけの努力におとしめて、「天与の資質」だけがものをいうような「きわめて閉鎖的な貴族社会」の復権をめざしたことで、サルトルはボードレールを批判するのである。

サルトルはさらに、ボードレールの自己欺瞞の問題を、18世紀から19世紀へと変化した、作家の社会における位置の問題と重ね合わせて論じる。のちに『文学とは何か?』で詳しく論

<sup>32</sup> « Lucidité, dandysme, autant de formes que prend ce couple "bourreau-victime" où le bourreau tente vainement de se détacher de sa victime et de se retrouver dans les traits bouleversés qu'elle lui livre. » (SARTRE, « un Collège spirituel », p. 10 / SARTRE, *Baudelaire*, p. 125.)

<sup>33</sup> « L'effort de dédoublement prend ici sa forme la plus nette : être à soi-même objet, se parer, se peindre comme une chasse, pour pouvoir s'emparer de l'objet, le contempler longuement et s'y fondre. » (SARTRE, « un Collège spirituel », pp. 10-11 / SARTRE, *Baudelaire*, pp. 125-126.)

<sup>34</sup> « Ainsi le devenir psychique chez lui, ne peut être que l'opération d'un incessant travail sur soi. Se gêner, se contraindre, pour être toujours au plus haut degré de la disponibilité : car la disponibilité n'est pas, chez lui, l'abandon guidant à l'instant mais une position de combat. » (SARTRE, « un Collège spirituel », p. 11 / SARTRE *Baudelaire*, p. 126.)

<sup>35</sup> « Seulement ces opérations intérieurs [de *travail sur soi*] ne peuvent avoir pour but de mener à bien une entreprise utile ; il faut qu'elles demeurent gratuites ; elles ne doivent pas non plus conduire à mettre en question la morale théocratique ; il leur faut donc se cantonner dans la pure gratuité du dandysme. » (SARTRE, « un Collège spirituel », p. 11 / SARTRE *Baudelaire*, p. 126.)

<sup>36</sup> « [...] [Baudelaire] prétend, par le dandysme, entrer dans une aristocratie très fermée "d'autant plus difficile à rompre qu'elle sera basée sur les facultés les plus précieuses, les plus indestructibles et sur les dons célestes que le travail et l'argent ne peuvent conférer". » (SARTRE, « un Collège spirituel », p. 11 / SARTRE *Baudelaire*, p. 127.)

じられる問題がここで素描されるのである。すなわち、18世紀までの作家は貴族社会に寄生して生きることができたが、フランス革命によって貴族社会が崩壊すると、作家はあらたな存在様態を模索することになる。ウエルギリウス以来続いてきた作家と貴族社会との関係は、19世紀に入って突然見直しを迫られた。その結果、作家は貴族社会において絶えず軽蔑されてきたブルジョワ階級の庇護を得なければならなくなった。ブルジョワ階級の支配下において、「ブルジョア階級は、たとえ圧迫階級となっても、寄生的ではなく、労働者を搾取したとしても労働者とともに働く。ブルジョア社会の内部における芸術作品の創造は、役務の提供であり、詩人は、技術者や弁護士と同じく、才能をブルジョア社会に提供し、ブルジョア社会が自らを認識するように援け、プロレタリア階級を圧迫する口実となる神話の発展に、貢献しなければならない」<sup>37</sup> ことになったのだ。そして、エミュー・オジェ、ロートレアモン、ランボー、ヴァン・ゴッホといった例外的な存在をあげることはできるものの、19世紀の芸術家の多くがこの屈辱から逃れたいと願い新しい時代に対応しなかったのだ、とサルトルは指摘する。端的にいえば、サルトルの目には、ボードレールが、ゴンクール兄弟やメリメやフローベールと同じく、「かつて彼を認めた寄生階級の諸性格を備え、その位置は必ず生産＝消費の世界以外の、非生産的活動の面に」<sup>38</sup> あるようなそうした「きわめて閉鎖的な貴族社会」に加わろうとした自己欺瞞的な芸術家として映ったのである。

消失したはずの貴族社会を芸術家たちが潜在的に立て直そうとしたこの集団について、サルトルはそれを「フリー・メーソン」<sup>39</sup> と呼び、デュルケムが「ゲマインシャフト」<sup>40</sup> として分類した共同体と重ね合わせ、「神話的社会」あるいは「コレージュ・スピリチュエル」と命名する。というのも、このコレージュを構成しているのは、「大部分すでに死んだ人たちと、今後生まれる子供たち」<sup>41</sup> という霊的な存在でのみ構成されているからである。

<sup>37</sup> « [...] : la bourgeoisie, en effet, si elle est une classe d'oppression, n'est pas parasitaire ; elle dépouille l'ouvrier mais elle travaille avec lui ; la création d'un œuvre d'art à l'intérieur d'une société bourgeoise devient une prestation de service ; le poète doit offrir son talent à sa classe, comme l'ingénieur ou l'avocat ; il doit l'aider à prendre conscience d'elle-même et contribuer à développer les mythes qui permettent d'opprimer le prolétariat. » (SARTRE, « un Collège spirituel », pp. 12-13 / SARTRE, *Baudelaire*, p. 128.)

<sup>38</sup> « C'est-à-dire que la collectivité où l'artiste va s'introduire devra retrouver les traits de la classe parasitaire qui le consacrait autrefois et se situer résolument en dehors du cycle production-consommation sur le plan de l'activité improductive. » (SARTRE, « un Collège spirituel », pp. 12-13 / SARTRE, *Baudelaire*, p. 128.)

<sup>39</sup> « [...] il ne vient pas [chez Flaubert] à l'esprit que le rôle même de l'écrivain peut changer au cours des siècles qui viennent, et avec l'optimisme naïf, qui accompagne ses déclarations les plus sombres, il forge une franc-maçonnerie dont il est sûr qu'elle a commencé avec le premier homme et finira avec le dernier. » (SARTRE, « un Collège spirituel », p. 14 / SARTRE, *Baudelaire*, p. 130.)

<sup>40</sup> « Tout d'abord, [une société discrète de la franc-maçonnerie] est construite sur le type de ce que Durkheim nomme la "solidarité mécanique" : [...] » (SARTRE, « un Collège spirituel », p. 14 / SARTRE, *Baudelaire*, p. 130.)

<sup>41</sup> « Cette société discrète [de la franc-maçonnerie], faite pour la plus grande part, de défunts et d'enfants à naître, est toute satisfaisante pour l'artiste. » (SARTRE, « un Collège spirituel », p. 14 / SARTRE,

ある意味において、貴族社会は死者と未来の子供たちの全体にたいして荣誉という抽象的概念を有機的に用いることで、社会の構成員が全体として共同体の維持に参画していたという点においてゲゼルシャフト的であった<sup>42</sup>。それにたいして、このゲマインシャフト的な「コレージュ」では、「全員が一つの共同体の活動に参加することがなく、各員は他の全員と隣り同志」<sup>43</sup>であって、その共同体の構成員にはその共同体の始まりから芸術家としての称号が与えられることになる。そして、その称号にふさわしい業績は、努力の賜物ではなく生まれながら与えられた資質としてみなされることになるのだ<sup>44</sup>。この誤った決定論の主たる責任をサルトルはフロバールに帰してはいるものの、ボードレールがこのコレージュへの参加を望んだことは、詩人がダンディズムに与える欺瞞的な宗教的性格から明々白々だとサルトルは断言するのだ<sup>45</sup>。いいかえれば、ポーにたいする崇拜も、究極的には、「芸術家たちの世俗の共同体」にたいしてボードレールが見出した「根強い宗教的価値」を証言するものに他ならないのである<sup>46</sup>。

とはいえ、ボードレールが「コレージュ・スピリチュエル」へ参加することだけを目指していたわけではない<sup>47</sup>。その証拠がボードレールのダンディズムであり、ダンディズムの理想はボードレールが決定論的な「コレージュ・スピリチュエル」を目指すことの欺瞞性を見極めるに十分な明晰さを持っていたことの証となっている。またそれは、「コレージュ・スピリチュエル」のモデルから「無動機性、ゲマインシャフト、寄生制度の観念を借り」ることによって、芸術家の本質的性格を極限まで押し進めて可能となる社会の素描ともなっているのだ<sup>48</sup>、

---

*Baudelaire*, p. 130.)

42 « Mais l'honneur, dans ce dernier cas [de l'aristocratie], est un lien de solidarité organique [Gesellschaft] : le noble a des obligations précises et diverses vis-à-vis de ses morts et de ses rejetons futurs ; c'est qu'ils existent par lui, il en a la charge, il peut les ternir ou les redorer. » (SARTRE, « un Collège spirituel », p. 14 / SARTRE, *Baudelaire*, p. 131.)

43 « Dans la société mythique que l'écrivain a choisie, chaque membre voisine avec tous les autres sans qu'ils soient engagés dans une action commune. » (SARTRE, « un Collège spirituel », p. 14 / SARTRE, *Baudelaire*, p. 131.)

44 « Ces grands morts, en effet, qui, pour la plupart, ont vécu dans la solitude, l'inquiétude et l'étonnement, qui n'arrivaient point à se penser tout à fait ni comme écrivains ni comme artistes et qui sont morts, comme tout un chacun, incertains, on leur confère du dehors — parce qu'ils sont *passés* et que leur vie apparaît comme un destin — ce titre de poète qu'ils ambitionnaient sans être sûrs de l'avoir atteint et, au lieu d'y voir le but de leurs efforts, on le conçoit au contraire comme une "vis a turgo", un caractère. » (SARTRE, « un Collège spirituel », pp. 14-15 / SARTRE, *Baudelaire*, p. 131.)

45 « Baudelaire, à n'en point douter, a choisi, lui aussi, d'entrer à ce collège. » (SARTRE, « un Collège spirituel », p. 15 / SARTRE, *Baudelaire*, p. 132.)

46 « Cela signifie que dans l'âme mystique de Baudelaire la communauté laïque des artistes a pris une valeur profondément religieuse ; elle devient une église. » (SARTRE, « un Collège spirituel », p. 16 / SARTRE, *Baudelaire*, p. 133.)

47 « Mais ce collège spirituel ne peut satisfaire tout à fait notre auteur. » (SARTRE, « un Collège spirituel », p. 16 / SARTRE, *Baudelaire*, p. 133.)

48 « Il s'agit d'une société d'artistes que Flaubert, Gautier et les théoriciens de l'Art pour l'Art avaient forgée. A ce modèle, elle emprunte les idées de gratuité, de solidarité mécanique et de parasitisme. Mais elle

とまでサルトルは断言している。結局のところ、理想像としてのボードレールのダンディズムにたいする、サルトルの評価は肯定的なものである。サルトルが批判の対象とするのは、そうした理想像が永続的な性格を持つことを拒否<sup>49</sup>したダンディズムの宗教的な側面なのであり、そのようなものとしてのダンディズムがサルトルの目には「自殺者クラブ」<sup>50</sup>として映るのである。こうしてサルトルは、ボードレールを語ることを通じて、芸術家にとっての新しい秩序の必要性を主張する。それは、宗教性を廃して高い倫理性に支えられた秩序でなければならないのである。

## おわりに

われわれはこうして、1942年中には『コンフリユアンス』誌編集部に送られていたはずの原稿が、パリ解放後まで同誌に掲載されずにいたのかという問いにたいしてひとつの解答の可能性を見出すのである。同時期に編集部に送られた『蠅』が、絶望の中に見いだすことができる希望を描き出しているのに対して、『コレージュ・スピリチュエル』は、ボードレールに施す実存的精神分析を通じて、墮落した宗教性によって高い倫理性をないがしろにした詩人の姿を糾弾している。このことは裏を返せば、芸術家が、そして芸術家ではない個人が、高い倫理性に裏打ちされた行動を実践しなければならないことを示している。

こうしたサルトルの主張は、ドイツ軍による占領下という状況においては、それがフローベールを筆頭とするフランス的精神を否定しているのだと誤解される可能性を含むと考えることができるのではないだろうか。その一方で、パリ解放後の状況下では、同じ『コレージュ・スピリチュエル』がフランス的精神の否定としてではなく、新たな秩序を高い倫理性によって実現しようという肯定的な呼びかけとしての役割を果たすことができたのではないだろうか。

キーワード：ドイツ占領下のフランス文芸誌、『コンフリユアンス』誌、サルトル、ボードレール

---

renchérit sur les conditions d'accès à cette association. Les caractères essentiels de l'artiste sont exagérés, poussés à la limite. » (SARTRE, « un Collège spirituel », p. 17 / SARTRE, *Baudelaire*, p. 134.) ; « L'exercice encore trop utilitaire du métier artistique devient le pur cérémonial de la toilette, le culte du beau qui produit des œuvres stables et durables se change en amour de l'élégance ; l'acte créateur du peintre ou du poète vidé de sa substance, prend forme d'acte strictement gratuit, au sens gidien, et même absurde, l'invention esthétique se transforme en mystification ; la passion de créer se fige en insensibilité. » (SARTRE, « un Collège spirituel », p. 17 / SARTRE, *Baudelaire*, p. 135.)

<sup>49</sup> « [...] ; par delà l'artiste, qui cherche encore à créer, il a projeté un idéal social de stérilité absolue où le culte du moi s'identifie à la suppression de soi-même. » (SARTRE, « un Collège spirituel », p. 17 / SARTRE, *Baudelaire*, p. 134.)

<sup>50</sup> « Mieux encore, le dandysme est un "club de suicidés" et la vie de chacun de ses membres n'est que l'exercice d'un suicide permanent. » (SARTRE, « un Collège spirituel », p. 18 / SARTRE, *Baudelaire*, p. 136.)

**Abstract**

*Baudelaire* comme « un Collège spirituel »

Shinya SHIGEMI

Avant la première publication de *Baudelaire* de Jean-Paul Sartre en 1946 aux Éditions du Point du Jour, un fragment intitulé « un Collège spirituel » est paru dans la revue littéraire *Confluences* en 1945. Malgré les recherches bibliographiques antérieures, qui considèrent que Sartre a accompli le texte vers 1944, nous pouvons penser que le texte d'« un Collège spirituel » est envoyé à la revue avant la fin de 1943. Or, la revue est censurée dès sa première parution en 1941. Mais c'est au cours de l'année 1942 qu'elle a souffert d'une suspension de parution en deux mois par l'autorité vichyssoise, au milieu d'une situation défavorable pour la publication et les éditions, avec la crise de papier, la pénurie de moteur et la diminution des moyens de transport. Quant au texte d'« un Collège spirituel », si l'on le compare avec un fragment des *Mouches* qui est envoyé en même temps que ce texte et qui est publié en 1943, il se caractérise par une critique sans pitié, non seulement contre Baudelaire, mais aussi contre Flaubert, Gauthier ou beaucoup d'autres écrivains et artistes français ; et il est possible que le texte nuirait à l'« esprit français » dans l'époque où se régnait le désespoir. C'est une des raisons pour lesquelles « un Collège spirituel » n'apparaît, pas sous l'Occupation, mais qu'après la Libération de Paris.

Keywords: les revues littéraires en France sous l'Occupation allemande, *Confluences*, Sartre, Baudelaire